

## 報告テーマ①[2006C]

### 児童生徒等に対する効果的な交通安全教育を普及させるために何が必要か

#### ～教育普及スキームの構築研究～市の文化的創造的機能を支える公共交通の役割

プロジェクトリーダー 小川 和久

#### (1) 研究目的と概要

本研究の目的は、児童生徒等に対する発達段階に応じた効果的な交通安全教育を普及させるための要件を明確にして、教育普及のためのスキームを構築することである。普及スキームの構成要素として、次の4点を設定し、基礎資料を収集することとした。①魅力ある教育プログラムの開発（とくに児童生徒の主体性を重視）、②エビデンス（効果測定の実証的データ）の蓄積、③教材・評価ツールの開発、④教育支援に関すること（指導者育成など）。

2018-2020年度の3年間の研究調査から、児童生徒主体の交通安全教育活動は、子どもたちの興味関心を引き出し、意識・行動変容を導く可能性が高いことが見出された。とくに2020年度は、生徒会が主催する交通安全シンポジウムの開催、交通安全推進委員会による交通安全新聞の発行、生徒会同士のWEB会議による他校との情報交換など、高校生による主体的な活動を支援し推進した。その結果、主体的な活動は生徒の自我関与の意識を高め、教育効果のヨコへの広がり（たとえば、部活動を通して全校生徒が関わる活動）と、タテへの広がり（たとえば、新入生に向けての交通安全動画の作成）を導く可能性が示唆された。児童生徒主体の活動がより一層社会に普及することを目指し、主体的な活動を奨励する褒賞助成制度の活用や、指導案・教材の作成等の支援サービスの提供という観点から、一連の研究成果を総括し、今後の課題を議論する。

#### (2) 質疑応答

Q. 中学生の安全確認挙動の多変量解析で集団歩行が安全確認を低下させるとの課題が指摘されているが、これに対する見解を教えてください。

A. 先頭についていき、後ろの生徒が安全確認せず事故をにあうことがある。2番目、3番目を走行が危険であることをきちんと指導すべきである。また、モデリング学習として自転車のハンドルを持って、実際にシミュレーションを行うことを実施しているが、これによって、安全に対する意識が残ると思われる。

Q. 子供たち自身が考えた交通安全対策案の中で、子供たち自身が安全のために止まるということをしているが、本来は自動車が止まるべきである。このことを子供たちに教えていくことで、成長した際にはそのような意識が醸成されるのではないか。

A. 全くその通りであると思う。石巻の事例では、のぼりを立ててウィンカーを出すことをドライバーに促す取り組みを行った。子供たち自身が大人に訴えていくことで大人への啓発につながった。また、横断歩道でお辞儀をすることも効果的である。これが、大人の行動を変えることにつながっている。こういう活動が広がっていくことで大人が考えるきっかけになると思う。

Q. 大都市部の交通安全教育を考えた場合に、高知県(地方部)の事例はそのまま適用できると思うか。

A. その地域の交通事故リスクは都市部や地方部で異なるため、周辺のリスクを把握し、それに合わせた教育をすることが前提であり必要である。

Q. 効果の持続性の観点から考えると、再教育が必要なのか、先ほど言及があったお辞儀をするような取り組みが大切なのかどちらか。

A. 何度もやると飽きられるので、楽しい活動にすることが必要である。例えば、ある交差点での危険性を高校生が小学生、中学生に教えるなどで、定着していくのではないか。高校生の立場では、小学生や中学生に教えた手前、そこでは危険な行為ができなくなる。このような、自然に安全が定着する仕組みを今後も検討したい。

### (3) 出席者の感想など(一部抜粋)

- ・教育普及において、児童生徒が主体となって取り組むことで、意識・行動変容への高い効果が得られると感じました。また、具体的な活動が紹介されており、自身の業務においても有意義な内容でした。
- ・子供を対象とした貴重な研究のため、研究成果が全国の小学校等関係各位に周知されることを期待します。
- ・最近時、小学生児童の交通マナーの良さが際立ち、逆に大人による乱暴な自転車運転、また横断歩道での歩行者優先がほぼ守られていないなど、子供たちの見本になっていない。大人への教育を徹底するプログラムをご提案いただき、将来ある子供たちを守っていきたくと痛切に感じます。

※本資料は発表者本人の事前確認を行っております。また、質疑応答および出席者の感想は基本的に原文のままとしてあります。